

教員・保育者養成系大学1年生への 鍵盤楽器演奏スキルに関する質問紙調査

——ML音楽室および音楽教育棟個人練習室の利用状況と併せて——

Perceived Responses to Keyboard Performance Skill Development in Music Laboratory: A survey of the university freshmen

緒方 満 ・ 野上 俊之 ・ 柿本 因子

Mitsuru OGATA, Toshiyuki NOGAMI and Yoriko KAKIMOTO

We surveyed the perceived responses of the 171 university freshmen (75 Department of Child Development and Education, 96 Department of Early Childhood Education). As a result, it shows five following remarks; (1) 39% (29/75) students of Department of Child Development and Education are beginners. They need a device teaching keyboard skill performance with considering them. (2) Both students like music itself, but they showed weak feelings. So the problem is to sweep their weak feelings away. More students of Department of Child Development and Education estimate that music class is important than the students Department of Early Childhood Education, and a lot of them answered that the opportunity to enjoy playing the piano was increased. (4) Practicing by themselves, students of Department of Child Development and Education often use ML (Music Laboratory), and the students of Department of Early Childhood Education use Lesson Room. And students feel that ML is useful. (5) 48% (46/96) Department of Early Childhood Education practice in person for three times in a week, and 30% (22/73) students of Department of Child Development and Education do. So we can see the result of the instruction in keyboard skill performance to the students of Department of Early Childhood Education. On the other hand, the students of Department of Child Development and Education need a device prompting to practice customary.

1 調査の目的

教員・保育者養成系学科の学生は、鍵盤楽器演奏スキル（以下ピアノスキル）を習得することが必要不可欠である。現代文化学部子ども発達教育学科（以下子ども学科）および短期大学部幼児教育科（以下幼児教育科）では、ピアノスキル習得のための授業（音楽教育専門科目「音楽Ⅰ」・「器楽」など）を学生全員に入学直後から履修させている。

学生にピアノスキルを習得させるにあたり、大学はどのような音楽学習環境を整備していくことが必要なのか。また、現行の授業体制や指導方法にはどのような課題があり、今後は何をどう改善すべきなのか。これらの検討に必要な基礎資料を入手するために、2010年度入学の子ども学科1年生75名と幼児教育科1年生96名との計171名の学生を対象に、ピアノスキル等に関する質問紙調査を実施し

た。質問項目は、ピアノ等の習い事経験に関する実態、音楽・音楽の授業・学生自身のピアノスキルに対する意識、およびピアノ自主練習の状況が分かるものとした。筆者らは調査結果について、子ども学科と幼児教育科とのそれぞれの相違点や共通点をふまえ、両学科の回答を比較・検討した。

ところでピアノスキル習得に関して、子ども学科と幼児教育科とでは授業体制、学習環境、入学前におけるピアノ等の習い事経験の有無などいくつかの相違点がある。例えば、両学科の相違点の1つは学生がピアノ自主練習を行う学習環境である。幼児教育科の学生はアップライトピアノ1台が備えられた音楽教育棟の個人練習室（防音完備）で練習している。この学習環境は従来型と言えよう。それに対して子ども学科の学生はML音楽室で練習している。この学習環境は最新型と言えよう。

ML (Music Laboratory)¹⁾とは、電子ピアノ（電子キーボード）を用い、指導者用楽器（親機）と学生用楽器（子機）をケーブルで接続することにより集団での音楽学習を効率的に行なうシステムである。本学のML音楽室には、指導者用電子ピアノ1台と学生用電子ピアノ60台があり、それらはすべて教卓にあるCPUで制御されている。CPUを操作すれば、一斉授業、合奏、アンサンブル、個別指導、および個人練習等、さまざまな音楽学習形態が可能となる。本学に限らず、すでに保育・幼児教育を中心とした教員養成校に多く導入されているが、今日では音楽大学や小中高の教員を養成する教育学部でも総合的・多面的音楽能力を高めるためにMLを設置する大学が増えている。ML音楽室の有効な活用の在り方について研鑽することも、本学音楽教育担当教員の重要な課題である。したがって本調査においては、ML音楽室の利用状況、つまり子ども学科の学生がML音楽室でどの程度練習しているのか、さらに、それは従来型の小練習室で練習している幼児教育科の学生と比較してどうなのかという点にも注目した。表1に、ピアノスキル習得に関する子ども学科と幼児教育科との相違点および共通点を一覧にして示す。

表1 ピアノスキル習得に関する子ども学科と幼児教育科との相違点と共通点

《相違点》		
	子ども学科	幼児教育科
入学試験での音楽実技の有無	実施していない。	AO入試を除く、それ以外の試験で音楽実技試験(歌唱・ピアノ演奏)を実施している。
ピアノスキル習得に関する授業体制	ML音楽室で実施。3名の担当教員による大集団指導体制（1クラスあたり40名）。	6名程度収容可能なレッスン室で実施。1名の教員による小集団指導体制（1グループ約6名）。
担当教員の特色	小学校音楽科実務経験者3名（うち2名は校長職を歴任）。	音楽大学で体系的なピアノ奏法を学んだ専門家6名と本学教員2名。
大学構内における自主練習の環境	ML音楽室（電子ピアノ60台設置）。	音楽教育棟の個人練習室（全16室）。ただし9月中旬以降ML音楽室も可。
《共通点》		
練習課題とする教材曲	『子どものうた200』 ²⁾ から適宜選択し、「弾き歌い」課題としている。年間20～30曲程度。	
「弾き歌い」小実技テストの実施	前後期あわせて30回の授業は5回を1サイクルとし6期に分けている。そして、それぞれの期毎に最終回には個別に「弾き歌い」を課題とする小実技テストを実施している。	
ピアノ独奏発表会の実施	前後期それぞれの最終回（第15回）には、ピアノ独奏発表会を行っている。発表曲目は自己のレベルに応じて教員と相談しながら決めている。『バイエルピアノ教則本』、『ブルグミュラー25の練習曲』、『ソナチネアルバム』、『ソナタアルバム』などから発表曲を選択する学生が多い。	

2 調査の方法

調査は、2010年7月、子ども学科は「音楽Ⅰ」、幼児教育科は「器楽」の授業中に一斉に質問紙を配付して実施された。調査対象者は、調査日の授業に出席し、質問紙への回答を了承した2010年度子ども学科1年生75名（男子25名 女子52名）、幼児教育科1年生96名（男子4名 女子92名）であった。表2に、質問紙の質問項目と回答の方法を示す。

表2 質問紙調査の項目と回答の方法

	質問項目	回答の方法
習い事経験に関するもの	比治山大学に入学する以前、ピアノ等の鍵盤楽器の習い事経験がありましたか？	「あり」または「なし」の2者択一。「あり」と答えた者は、期間を記入。
音楽に対する意識に関するもの	音楽は好きですか？	5段階尺度で回答。
	歌うことは好きですか？	5段階尺度で回答。
	歌うことは得意ですか？	5段階尺度で回答。
	ピアノを演奏することは好きですか？	5段階尺度で回答。
	ピアノを演奏することは得意ですか？	5段階尺度で回答。
音楽の授業に対する意識に関するもの	大学で受講している音楽に関する講義や演習での音楽活動は好きですか？	5段階尺度で回答。
	大学で受講している音楽に関する講義や演習は、役に立っていますか？	5段階尺度で回答。
自己のピアノスキルに対するもの	大学に入学後、自身のピアノ演奏力が向上したと感じますか？	5段階尺度で回答。
	大学に入学後、ピアノを弾くことが楽しいと感じる機会が増えましたか？	5段階尺度で回答。
ピアノ自主練習の状況に関するもの	《子ども学科》ML音楽室でピアノの練習をしていますか？	「あり」または「なし」の2者択一。
	《幼児教育科》音楽教育棟の練習室でピアノの練習をしていますか？	
	《子ども学科》ML音楽室は利用しやすいですか？	5段階尺度で回答。
	《幼児教育科》音楽教育棟の練習室は利用しやすいですか？	
	大学でのピアノの練習方法について何か要望があれば自由に書いてください。	自由記述で回答。
	《子ども学科》ML音楽室をピアノの練習のために、どのくらい利用していますか？	以下のいずれかかを選択。
	《幼児教育科》音楽教育棟の練習室をピアノの練習のために、どのくらい利用していますか？	「ほぼ毎日」「週に3回」「週に1回」「2週間に1回」「月に1回」「利用していない」
	《子ども学科》ML音楽室で練習する場合、1回あたりの平均練習時間はどのくらいですか？	以下のいずれかかを選択。 「2時間以上」「2時間」「1時間30分」「1時間」「30分」「20分未満」
《幼児教育科》音楽教育棟の練習室で練習する場合、1回あたりの平均練習時間はどのくらいですか？		

3 調査の結果

(1) ピアノ等の習い事経験に関する実態

表3に、調査対象学生の入学前におけるピアノ等の習い事経験を、学科別、有無別に割合（人数）で示す。

表3 ピアノ等の習い事経験の有無

子ども学科 (n=75名)		幼児教育科 (n=96名)	
経験あり	経験なし	経験あり	経験なし
61% (46名)	39% (29名)	86% (82名)	14% (14名)

大学入学前におけるピアノ等の習い事経験者（以下経験者）の割合を比較すると、『幼児教育科86%>子ども学科61%』であった。幼児教育科はAO入試を除くすべての入学試験において、ピアノ演奏の実技試験を課している。その理由としては、幼児教育科が養成する幼稚園教諭・保育士には十分なピアノスキルが求められ、さらに、わずか2年後には教育・保育現場で音楽教育実践の即戦力が求められること、があげられる。幼児教育科入試の合格をめざす者には一定水準のピアノスキルを保有しておくことが必要であり、そのためにはピアノの習い事、すなわちピアノ教師による体系的なレッスンに通うことが望ましい。なぜならピアノ初心者が独学でピアノスキルを身につけることは至難の業である。したがって幼児教育科学生に経験者が多いのは当然ととらえられる。これらの学生をさらに鍛え、強固なピアノスキルを保有した、乳幼児への音楽教育実践力に優れた質の高い幼稚園教諭・保育士を育成することが、幼児教育科には期待される。幼児教育科が音楽大学で体系的なピアノ奏法を学んだ専門家を担当教員として配しているのもそのようなニーズと合致しているからと考えてよい。

一方、子ども学科はすべての入学試験において音楽実技試験を課していない。その理由としては、小学校教員の養成が子ども学科の主目的であり、小学校教員採用試験で最低限求められる演奏能力が『バイエルピアノ教則本』終了程度の演奏レベルであること、つまりこのレベルならば入学後の4年間で到達が十分可能だと想定できることなどがあげられる。しかしそのことによって、子ども学科は、39%の未経験者すなわちピアノ初心者を抱えながら、ピアノスキル習得のための授業を開始しなければならない。ちなみに未経験者29名の男女別内訳は男子21名女子8名であり、男子の未経験者が非常に多い。したがって子ども学科では、未経験者の学生に、ピアノスキルに関心・意欲をもたせられるか、忍耐強くピアノ練習に向き合わせられるか、そして必要なピアノスキルを身につけさせられるか、が大きな課題となる。子ども学科がベテランの小学校音楽科実務経験者3名を担当教員に配しているのは、これらのことへの対処が理由の1つでもある。だがこのままの指導体制で、はたして4年後に音楽科授業実践に耐えうるピアノスキルを保有した学生を輩出できるかどうか、このことは今後とも注意深く検討していく必要がある。ちなみに2010年度後期より、子ども学科はそれまでの3名に、ピアノ奏法を専門的に学んだ教員1名を加え計4名体制で指導にあたっている。

(2) 音楽・音楽の授業・自己のピアノスキル等に対する意識

① 音楽に対する意識に関して

表4に、音楽、歌唱、ピアノ演奏、および鑑賞に関する回答（5段階尺度）の結果を、質問項目別に、学科別に平均（SD）で示す。

表4 音楽、歌唱、ピアノ演奏、鑑賞に対する意識

質問項目	子ども学科 (n=75名)	幼児教育科 (n=96名)
音楽は好きですか?	4.31 (0.66)	4.09 (0.94)
歌うことは好きですか?	4.19 (0.88)	3.86 (0.95)
歌うことは得意ですか?	2.84 (0.89)	2.68 (0.95)
ピアノを演奏することは好きですか?	3.87 (0.89)	3.51 (1.08)
ピアノを演奏することは得意ですか?	2.56 (0.93)	2.49 (1.01)
音楽を鑑賞すること(聴くこと)は好きですか?	4.33 (0.78)	4.47 (0.66)

両学科の学生とも、「音楽が好き」と「音楽鑑賞が好き」のポイントが高く、音楽に対して好意をもっていることが分かる。また両学科とも、「歌うことが好き」>「ピアノ演奏が好き」、《「歌うことが得意」>「ピアノ演奏が得意」》で、歌唱をピアノ演奏よりも好み、さらに歌唱をピアノ演奏よりも得意と思っていることが分かる。表4に示した項目中最もポイントが低かったものは、「ピアノ演奏が得意」であり、ポイント自体も子ども学科が2.56 (0.93)、幼児教育科が2.49 (1.01)とかなり低かった。このことから両学科とも多くの学生がピアノ演奏に関して苦手意識をもっていることが読み取れる。この点については、両学科の音楽教育担当にとって今後の課題といえよう。将来自己のピアノスキルに自信をもち、ピアノを積極的に活用して保育・音楽教育実践に携われる学生に育て上げることが筆者ら音楽教育担当者の使命であろう。

② 音楽の授業、および学生自身のピアノスキルに対する意識に関して

表5に、音楽の授業、および自己のピアノスキルに関する回答(5段階尺度)の結果を、質問項目別に、学科別に平均(SD)で示す。

表5 音楽の授業、ピアノスキルに対する意識

質問項目	子ども学科 (n=75名)	幼児教育科 (n=96名)
音楽の講義や演習での音楽活動は好きですか?	4.05 (0.71)	3.35 (0.79)
音楽の講義や演習は役に立っていますか?	4.31 (0.59)	3.86 (0.61)
入学後ピアノ演奏力が向上したと感じるか?	3.82 (0.74)	3.68 (0.66)
ピアノ演奏が楽しいと感じる機会が増えたか?	4.06 (0.73)	3.56 (0.93)

すべての項目において、子ども学科のポイントが幼児教育科を上回っている。詳細にみると、第1に、音楽の授業に関する子ども学科のポイントは「4」以上であり、子ども学科の学生は幼児教育科よりも音楽の授業を高く評価していることが分かる。第2に、ピアノ初心者が39%いる子ども学科学生の多くが「ピアノ演奏を楽しいと感じる機会が増えた」と答えている。この結果は、子ども学科の授業担当、すなわちベテランの元小学校音楽実務経験者による指導が功を奏していることが1つの要因と言えよう。長年にわたり、多くの一般的な児童、すなわち音楽科授業だけが唯一の音楽学習機会である児童に音楽教育実践を行ってきた手腕がここで活かされていると推察できる。

ところで、幼児教育科のポイントも決して低くはないが、今回の結果以上に、音楽教育開始時期から「授業が好き」「ピアノが楽しい」と学生に感じさせる指導の工夫を探究することが幼児教育科の課題としてあげられよう。幼稚園教諭・保育士は乳幼児への音楽教育実践者である。乳幼児に対する音楽教育では、音楽の楽しさや喜びを乳幼児に存分に味わわせることが重要になる。そのような実践者をめざす学生に、学生が音楽を学習する過程では、音楽に関する理解の深化やスキルの

向上に加えて、音楽の楽しさや喜びを味わう機会を導入期から数多く提供することは大切である。

(3) 学生のピアノ自主練習の状況

① ML音楽室および音楽教育棟個人練習室の利用状況

【子ども学科学生のML音楽室利用状況】

本学のML教室は全学的に最も使用頻度の高い講義棟の3Fに位置しており、学生にとっては便利がよい。ML音楽室は施設がされておらず、学生は平日の8:00~20:00に利用可能である。ML音楽室が授業等で使用されておらず、空いている場合は、電子ピアノ60台のどれでも先着順に練習できる。授業中等の場合は、音楽室の後方をカーテンで仕切り、電子ピアノ18台は使用できるようにしている。ML音楽室では、多くの学生が同一空間で同時にそれぞれの電子ピアノで練習することになる。多数の学生が同時に練習しても困らないように、つまり練習中のピアノの音が練習者相互の障害にならないように、外部スピーカは遮断し、ヘッドフォンを付けて練習するよう指導している。本調査の時点で、ML音楽室での練習を許可されている学生は、本調査対象の子ども学科1年生81名の他に、子ども学科2年生71名、幼児教育科2年生119名であった。

さて、子ども学科1年生は「ML音楽室でピアノの練習をしていますか?」という質問には73名(97%)が「している」、2名(3%)が「していない」と回答した。「ML音楽室は利用しやすいですか?」という質問には44名(60%)が「とても利用しやすい」、26名(36%)が「利用しやすい」、2名(3%)が「ふつう」、1名(1%)が「利用しにくい」と回答した。子ども学科の学生は、ほぼ全員がML音楽室をピアノ練習に利用していること、および「利用しやすい」と感じていることが分かった。

【幼児教育科学生の利用状況】

本学音楽教育棟は、多くの講義室がある構内中心部からはやや離れたところに位置している。小練習室はその2Fに16室あり、学生は平日の8:00~20:00に利用可能である。練習室は1部屋ずつ区切られ、防音も施されており、入り口に小窓があるものの、練習中に他者から干渉されることはない。本調査の時点でこの小練習室の利用を許可されている学生は、本調査対象の幼児教育科1年生103名の他に、幼児教育科2年生119名であった。

さて、幼児教育科1年生は「音楽教育棟の練習室でピアノの練習をしていますか?」という質問には94名(98%)が「している」、2名(2%)が「していない」と回答した。「音楽教育棟の練習室は利用しやすいですか?」という質問には30名(31%)が「とても利用しやすい」、54名(56%)が「利用しやすい」、12名(13%)が「ふつう」、と回答した。「利用しにくい」と回答した学生は0名であった。幼児教育科の学生は、ほぼ全員が小練習室をピアノ練習に利用していること、および「利用しやすい」と感じていることが分かった。

【自主練習環境におけるML音楽室と音楽教育棟小練習室の課題】

上記の結果からみて、ML音楽室も音楽教育棟小練習室も、学生が利用しやすいと感じながら練習に使用していることが分かった。ただし、ML音楽室は60%の学生に「とても利用しやすい」と評価されたが、音楽教育棟小練習室を「とても利用しやすい」と評価している学生は30%にとどまった。以上から、従来型小練習室と同様に、最新型ML音楽室は学生の自主練習環境として適合していると評価できよう。ML音楽室は、設置当初、学生がどの程度実際に利用するのか不安視されていたが、特段の問題はないことが分かった。

しかし学生の自由記述から、ML音楽室と音楽教育棟小練習室の学習環境について今後改善すべき課題も明らかになった。ML音楽室では、「周りの私語が最近増え、練習に集中できない」、「外部スピーカで音を出しながら練習する人がいて困る」、および「音楽室で飲食している人がいる」

等の指摘があった。ML音楽室学習環境の特徴は共同的側面にある。例えば図書室などの環境と似ている。他者の練習の妨げにならないよう、使用上ルールの周知徹底を図ることが肝要であろう。

音楽教育棟小練習室では、「エアコンの補修」、「練習室の増設」、「使用可能時間の増大」、「防音の強化」、および「メトロノームの設置」の要望があった。よりよい環境整備が学生の自主練習効果の促進に波及することはまちがいない。特に、学生数の多さからみて練習室が16室ではあまりにも少なすぎる。学生の要望事項に対して謙虚に responding していくことは、大学として怠ってはならない努力事項である。

② 学生のピアノ自主練習回数と時間

表6に、学生のピアノ自主練習回数と1回の練習に費やしている練習時間を、学科別に割合（人数）で示す。

表6-1 ピアノ自主練習の回数

練習回数	子ども学科 (n=73名)	幼児教育科 (n=96名)
ほぼ毎日	1% (1名)	10% (10名)
1週間に3回	29% (21名)	38% (36名)
1週間に1回	47% (34名)	39% (37名)
2週間に1回	19% (14名)	10% (10名)
1箇月に1回	3% (2名)	1% (1名)
していない	1% (1名)	2% (2名)

表6-2 ピアノ自主練習1回の練習時間

練習時間	子ども学科 (n=73名)	幼児教育科 (n=96名)
2時間以上	—	3% (3名)
2時間	12% (9名)	11% (11名)
1時間30分	26% (19名)	20% (19名)
1時間	54% (39名)	50% (48名)
30分	8% (6名)	16% (15名)

両学科の練習回数を比較すると、両学科の顕著な違いが分かる。幼児教育科は1週間に3回以上練習する学生が48% (46/96名) であるが、子ども学科は30% (22/73名) しかいなかった。このことは、幼児教育科学生の方が、子ども学科学生よりも、真摯にピアノスキル習得にのぞんでいる証である。ピアノスキルの習得にとって最も大切な要素は、「日々欠かさず練習を継続すること」、つまり練習の習慣化と言ってよい。この点においては、幼児教育科のピアノスキル指導が優れていることが分かる。ただし両学科とも、練習回数が1週間に1回の学生が非常に多いが、これでは十分なピアノスキルを習得することはかなり困難である。特に子ども学科は、学生の練習回数を増加に向かわせる指導の工夫が大きな課題である。

次に、1回の練習に費やしている練習時間を調べたが、特に問題はみられなかった。学生がピアノの自主練習に費やす時間は、大学生がその他多くの科目の予習復習やサークル等の活動に費やす時間を考慮すると、1時間程度でよいと考えられる。

さて、入学前における音楽の習い事未経験者、すなわちピアノ初心者には、どの程度ピアノを練習しているのであろうか。表7に、ピアノ初心者の自主練習回数を学科別に割合（人数）で示す。

幼児教育科のピアノ初心者は1週間に3回以上練習する学生が78% (11/14名)、子ども学科のピアノ初心者は52% (14/27名) であった。ここでも《幼児教育科>子ども学科》であり、幼児教育科が初心者への指導でも優れていることが分かる。子ども学科にとって、練習回数が1週間に1回以下の

表7 ピアノ初心者の自主練習回数

練習回数	子ども学科 (n=27名)	幼児教育科 (n=14名)
ほぼ毎日	4% (1名)	14% (2名)
1週間に3回	48% (13名)	64% (9名)
1週間に1回	33% (9名)	22% (3名)
2週間に1回	15% (4名)	—

ピアノ初心者学生48% (13/27名) をどのように適切に指導するかは重要な課題である。おそらくこれらの初心者はピアノの自習が困難な面も多分にある。現在子ども学科は、「ピアノ塾」, 「サマー・スプリングスクールーピアノじっくりゆっくり復習講座ー」等を授業外に開催しているが、さらなる補習体制の充実と授業自体の改善を図る必要がある。

4 まとめと今後の課題

本調査で明らかになった主な所見は以下の5点である。

- 子ども学科にはピアノ初心者が全体の39% (29/75名) おり、彼らに配慮したピアノスキル指導の工夫が必要である。
- 両学科の学生とも、音楽自体には好意を示したが、ピアノ演奏には苦手意識を示した。ピアノ演奏に対する学生の苦手意識を払拭させることが指導上の課題である。
- 子ども学科学生の方が、幼児教育科学生よりも、音楽の授業を高く評価し「ピアノ演奏を楽しんでいる機会が増えた」と答えた。幼児教育科は、これまで以上に「授業が好き」「ピアノが楽しい」と学生に感じさせる指導の工夫を探究することが課題としてあげられる。
- ピアノ自習練習に際し、子ども学科学生はML音楽室を、幼児教育科学生は音楽教育棟小練習室をよく利用していることがわかった。また、子ども学科学生はML音楽室を利用しやすいと感じていることがわかった。
- 1週間に3回以上ピアノ自主練習している学生は、幼児教育科は48% (46/96名)、子ども学科は30% (22/73名) であった。このことから幼児教育科ピアノスキル指導の成果が認められる。一方子ども学科には練習の習慣化を促す指導の工夫が求められる。

今回は質問紙調査という方法で情報を収集したが、ピアノスキル習得に関する状況をより詳細に明らかにするには、学生のピアノ演奏そのものやその他の音楽能力を研究対象としていかなばならない。次回は、是非、学生の演奏や音楽能力に視点をあてた調査を実施したい。加えて、ML音楽室の有効な活用方法や問題点などについても探究していきたい。

〈注〉

- 1) 「ミュージック・ラボラトリー (ML) とは」 日本電子キーボード学会ML研究部会HPより引用
<http://ryu.s90.xrea.com/>
- 2) 小林美実編『子どものうた200』チャイルド社、2009年第92刷 (1975年初版)

緒方 満 (子ども発達教育学科)
野上 俊之 (短期大学部幼児教育科)
柿本 因子 (短期大学部幼児教育科)
(2011. 11. 29 受理)